

Kitayama ONE





京都の銘木 北山杉

京都の北山杉は細く真っ直ぐな丸太で、元口（根本）と末口（先端）の径がほとんど変わらず、節のない非常に滑らかな表面を持つことで知られる銘木です。

表面の表情にも様々な種類が存在し、正円に近い断面のものや表面に絞りと呼ばれる凹凸のついたものがあります。

いずれもその表情には人の目を楽しませる雰囲気があり、和室の床柱や伝統的な日本建築の柱・梁・垂木等に古くから用いられてきました。



北山杉の里 中川

京都の中心市街地から車で約 30 分の場所にある中川と呼ばれる地域が、約 600 年前から続く北山杉の産地です。

写真の背面に見えるのが、丸太に節が出ないように丁寧に枝打ちされた杉林です。

手前の建築物は、切った丸太に含まれる水分を自然乾燥させるための小屋です。



熟練のクラフトマンシップ

美しい北山杉の磨き丸太は、その生産過程で熟練の技を必要とします。

不要な箇所を落とすための鎌や、皮を剥ぐための道具は、職人1人1人の手に合わせて作られたものです。

皮をはいだ後の丸太は、近くにある滝壺から取られる砂を使って手作業で磨かれ、滑らかで光沢のある丸太になります。



北山杉を象徴する「台杉」

北山杉の中でも特に細くて真っ直ぐな丸太は、台杉と呼ばれる特別な木から採れるものです。

剪定して作られた”台”から生える芽を真っ直ぐに育てる方法は、この地域に継承されてきた独自の技法です。

この丸太は直径 30~50mm 程度と非常に細く、それでいて既製品の丸棒とは異なり、自然の木肌をそのまま残しています。



繊細さを追求めた北山杉

多くの杉の産地は、より太く材積の大きな木をつくることに注力してきましたが、近くに吉野川が流れる吉野杉や、米代川流域で生産される秋田杉などと異なり、京都の北山には大きな川がありません。

舟やいかだを使わず人力による運搬に頼らざるを得なかったという地理的な要因から、むしろ細身に繊細な材を丁寧に育てることに特化して銘木が生まれたという歴史があります。

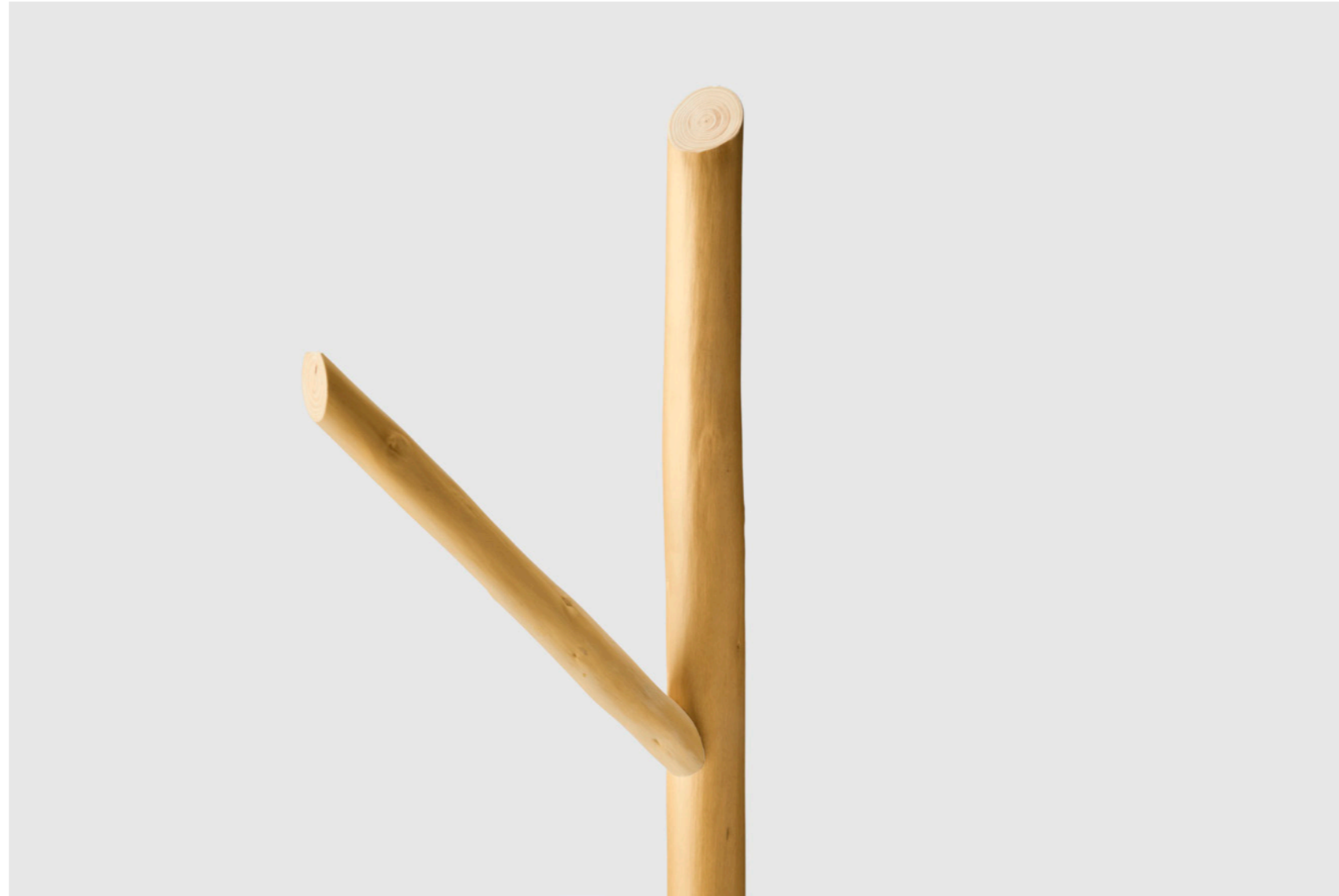


Kitayama ONE

この歴史と伝統を伝えるために、滑らかで美しい北山杉の丸太を使った、自然素材のコート掛けをつくりたいと考えました。

空に向かってまっすぐに伸びる台杉をモチーフとしたデザインで、プロトタイプを **Kitayama ONE** と名づけました。

丸太はそれぞれ微妙に表情が異なるため、どの製品も 1 点物の家具となります。



小口に見える丸太の年輪

丸太の先端は斜めにカットされ、密に重なった美しい年輪が見えるようになっていきます。

あえて断面を見せることで、コート掛けを使う方にこの木が育てられた時間や歴史を感じてもらえるのではないかと考えました。

製品に掛けるジャケットやスカーフを傷つけることの無いように、角は丁寧にやすりがけされています。



ひかりつけの接合部

腕木の接合部には”ひかりつけ”と呼ばれる伝統的な大工の技が使われています。

いびつな形同士をぴったりと隙間なく接合する技術で、ほぞの形は手作業で削り出されています。

建築物では、凸凹のある天然の基礎石に直接柱を建てる際に用いられる技法ですが、昨今ではその技術を持つ大工は非常に少なくなってしまいました。



鞍馬石の脚部

コート掛けの脚部には、京都市北部の鞍馬で産出される鞍馬石を使うことにしました。

石に含まれている磁流鉄鋼が時間の経過とともに酸化し、徐々に茶色い色味が出てくるという特徴があります。

日本のわびさびの精神を表現する石として、寺院や神社の他、茶室の庭でも重宝されています。



天然の錆び色と丸い形

鞍馬石は土から採掘される時点で、表面が酸化して錆び色になっており、角が取れて丸みを帯びた形をしています。

採石量が極めて限られているため、現在では希少な高級石材になっています。

プロトタイプの製作に際しては採掘場を幾度も訪ね、鞍馬石の中でも形や色が優れたものを選定しました。

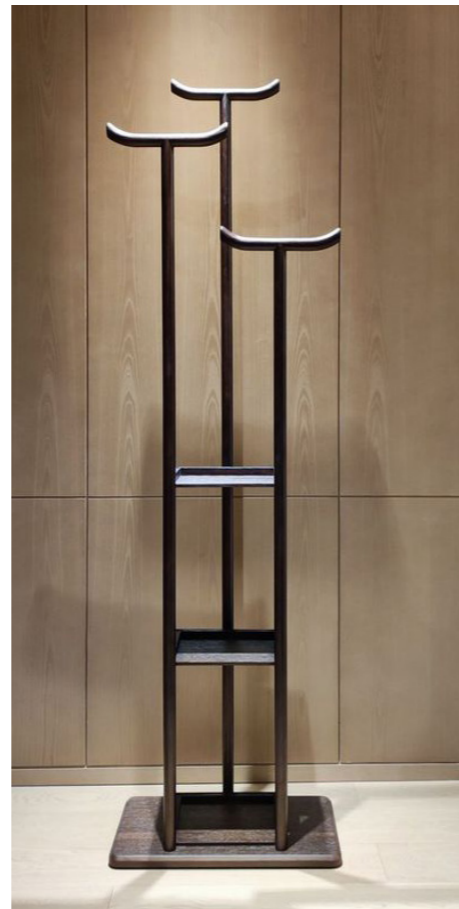


使用時のイメージ

試作品にジャケットとストールを掛けた写真です。

自然素材を活かしたコート掛けが、ハンドメイドの衣類の魅力をより一層際立たせます。

脚部に重量のある鞍馬石を使用しているため、厚手のコートなどを掛けた場合でも安定性に優れたデザインとなっています。



既存製品との比較検討

一般的なコート掛けのデザインは、直線的で工業化され過ぎているように感じました。

既存プロダクトのリサーチを通して、もっと自然で有機的なコート掛けが作れないかと強く思うようになりました。

また、製品をディスプレイしたり、お気に入りの洋服を綺麗に飾るために使用されるシーンを想定すると、コート掛け自体は装飾的なデザインで目立つものではなく、製品の背景としてシンプルな姿であるべきだと考えました。



サイズバリエーション

試作品として、大小2つのサイズを製作しました。大きい方の高さが1800mm、小さい方の高さが1550mmです。

丸太を切る長さは自由に調節できるため、ディスプレイするものの大きさに合わせた特注も可能です。

また、必要に応じて1本の支柱に複数本の腕木を取り付けることもできます。



運搬対応・ディスプレイ調整

支柱は底面から座金とボルトで固定されているため、石と丸太は分解して別々に持ち運ぶ事ができます。
また、腕を出す方向もボルトを締める際に自由に調節することができ、右向き・左向きを気にする必要はありません。
組立てや分解は、大工なしでも一般的なレンチで簡易に行えるように工夫しました。



Kitayama ONE

Designed by

Kosuke Nakakura Architects

Kitayama Cedar Supplied by

Nakagen Forest

Kurama Stone Supplied by

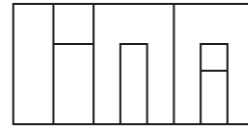
Yamafuji Stone

Manufactured by

Takeda Construction Company

Photos by

Yagi Studio



Kosuke Nakakura Architects

株式会社 中倉康介建築設計事務所